

日本分析化学会第54年会

1 はじめに

日本分析化学会第54年会は、2005年9月14日（水）から16日（金）の3日間にわたり、名古屋大学東山キャンパス内のIB電子情報館、工学研究科1号館、工学部2号館、工学部7号館を会場として開催された。本年会は、北見で開催された第66回分析化学討論会と互いに開催時期が近いために、講演申込数がなかなか伸びずに心配されたが、最終的には講演総数854件（研究懇談会講演14件、受賞講演7件、シンポジウム講演6件を含む）、参加登録者約1450名と、盛大な年会となった。また、本年会は、愛知万博（愛・地球博）の会期中に開催されたため、宿泊や交通面で心配があったが、特に大きな問題はなかったようであり、関係者一同はと胸をなでおろした。本年会の会場となった名古屋大学東山キャンパスは、地下鉄名城線「名古屋大学」駅下車すぐと交通アクセスが非常によく、また懇親会場のメルパルク名古屋も地下鉄東山線「千種」駅から程近い場所であったため、シャトルバスなどの運行は行わなかったが、参加者の皆様には不便をかけることはなかったと思われる。

2 講演

講演分類は例年どおり29としたが、講演区分は、今後も研究の進展とともに修正を加えていく必要性が感じられた。これは、今後研究分野の境界領域や横断的なスタンスで展開されている研究がますます増加することが予想されるためであり、一例として、分析対象試料で分類してプログラムすると、同じ対象試料に対する異なるアプローチが同一の会場で聞けるため、聴講者にとって多角的な情報収集が可能になるように思われる。本年会の一般講演は10会場で行われ、講演申込数や関連する研究分野などを考慮して、会場の広さや配置を決定した。講演分類ごとの発表件数や聴講者数などについては、表1にまとめて示す。本年会では、他支部からの要請などもあり、口頭発表の中から優秀発表賞を選定し、実行委員長名で表彰することとした。選考方法については、優秀発表賞選考委員の皆様にご苦労いただき、座長や会場責任者の意見を参考に3日間を通して各会場で1講演のみを選定して、合計10講演を優秀発表賞として表彰した。受賞者及び受賞講演は、別にまとめたのでご参照いただきたい。

本年会では、初めての試みとして、パワーポイントによる口頭発表を原則とした。企画側、講演者側いずれにとっても初めての経験であるため、企画当初は混乱も予想されたが、①すべての講演会場で使用するパソコンを統一する、②各講演会場に2台のパソコンを配置して時間帯により切り替えて使用する、③パソコン専属のアルバイト学生を配置する、④講演1時間前までに講演で使用するファイルを受け取る、⑤講演会場と同一のパソコンを試写室に配置し講演者に事前に確認してもらう、などの対策を講じたことで、ほとんどトラブルがなく講演を行うことができた。

ポスター発表に関しては、近年のポスター発表への申込件数の増加を考慮して、総合受付に隣接したプレゼンテーションスペースを会場として使用した。この会場では、備え付けのポスターボードを利用するため1セッションにつき52件が上限で



IB電子情報館

表1 第54年会分類別講演申込及び聴講者数一覧表

分類番号	一般講演件数	最大聴講者数	一般ポスター	若手ポスター	テクニカルレビュー
01: 原子スペクトル	34	100	12	2	4
02: 分子スペクトル	17	50	13	5	2
03: レーザー分光	11	40	2	3	
04: X線	11	40	6	4	
05: 放射化学	1	20			
06: NMR	4	30	4	1	
07: 熱分析	1	70	1	2	
08: センサー	14	45	14	2	
09: 電気化学	30	50	10	3	
10: 質量分析	15	50	8	2	4
11: 有機微量	1	35			1
12: FIA	12	50	10	6	
13: LC	34	80	27	8	7
14: GC	11	55	8	2	1
15: 電気泳動	16	35	18	5	
16: マイクロ分析化学	38	100	8	11	1
17: 分離・試薬	14	35	5	5	1
18: 抽出・イオン交換	24	40	15	2	
19: サンプリング, 前処理	5	60	4	2	5
20: 分析化学反応・速度論	1	30	2		
21: 標準試料	3	20	5		
22: 基礎理論・基礎データ	4	25	2		
23: 環境・地球化学A	48	80	24	5	
24: 環境・地球化学B	26	65	26	3	
25: 生体関連・法科学	22	50	19	3	1
26: バイオ	31	65	10	8	1
27: 無機・金属材料	7	70	4		1
28: 有機・高分子材料	9	50	0	2	1
29: その他	6	35	2	1	1
合計	450		259	87	31

あり、講演件数を5セッションで合計260件に限定せざるを得なかった。そのため一部の申込者には口頭発表に変更をお願いすることとなった。各セッションとも、常時150名ほどの参加者が来場し、活発な議論が行われていた。また本年会では、ポスター賞選考委員会を設置し、1セッション毎2件、合計



講演会場



ポスター及び展示会場

10 件のポスター発表を、優秀ポスター賞として実行委員長名で表彰した。

3 若手企画

若手シンポジウム「越境する分析化学」(1 日目, 13:00~16:00)

〔企画責任者: 石田康行 (名大エコ科学)〕

本シンポジウムの趣旨は、他分野の研究者による講演や総合討論等を通じて、新規融合領域の創成について議論することであった。まず、3 名の講師から、分析化学と他分野との学際領域に関連した話題提供をいただいた。「関野 樹 (総合地球環境学研究所): 学際研究の中での分析化学—「地球環境学」の場合」「真道洋子 (中近東文化センター): 考古学における分析化学の有用性~エジプトの発掘現場からの報告~」「奥山修司 (愛知県警察本部): 裁判化学ってなに?」の講演が行われた後、約 30 分にわたり総合討論が行われ、50 名あまりの参加者により活発な議論が行われた。

若手ポスターセッション「ユニークメソドロジー」(1 日目, 16:00~ミキサー終了時)

〔企画責任者: 手嶋紀雄 (愛知工大)〕

本ポスターセッションは、日常的に使用している方法論の原理や、論文には記載されないようなノウハウについて情報を交換し合うことで、各方法論のさらなる洗練化を目的として企画された。当初約 40 件の講演を見込んで案内をしたが、締切間際になっても十数件しか集まらず、企画者一同肝を冷やしたものの、ふたを開けてみれば 87 件の申込をいただき、逆にうれしい悲鳴を上げる結果となった。南部食堂をポスター会場にしたが、食堂内の衝立 (ついたて) を食卓に載せてポスターボードとして利用するなど、まさに手作りのセッションであった。このポスターセッションは、同日に開催された若手シンポジウムに引き続き開催したが、ミキサー直前の夕刻に設定し、南部食堂を会場としたことから、わずかではあるがジュース、ビール、おつまみを用意した。そのおかげもあってか、参加者は 200 名を越え、ディスカッションは大変活発に行われた。数件の発表者は、実験器具を持ち込み、デモンストレーションをしていた。これはポスターセッションならではのあり、これからの新しい発表スタイルとなっていくかも知れない。また、9 件の発表を若手ポスター賞として実行委員長名で表彰し、ミキサー会場にて賞状および副賞が贈呈された。

4 特別シンポジウム (一般公開)

「先端分析・計測機器開発のニューフロンティア」(3 日目,

13:00~17:00)

〔企画責任者: 原口紘丞 (名大院工), 山田碩道 (名工大)〕

これまで分析化学は基礎教育であり、分析機器は研究・生産・管理のための道具であるとする風潮から、科学技術開発の最前線においては、その役割は軽視される傾向にあった。しかし、新分析・計測機器・新分析法の開発は、それまで見えなかった自然、材料、生物の新しい世界の可視化を可能にし、新しい科学技術、材料、医療技術・創薬が誕生する契機となることが期待される。我が国が科学技術創造立国として更なる発展をめざすには、先端計測・分析機器の開発および施設の充実、推進が国家施策として急務であり、このような社会的背景から、平成 16 年度から文部科学省による「先端分析・計測機器開発プログラム」が国家プロジェクトとして開始されている。そこで、第 54 年会実行委員会と日本学会会議化学研究連絡協議会の共催で、「先端分析・計測機器開発のニューフロンティア」と題した特別シンポジウムを、3 日目の 13 時から 17 時までの予定で開催した。

まず、主催者である原口紘丞年会実行委員長と寺部 茂日本学会会議化研連委員から開会の挨拶があり、続いて事例研究として以下の 3 件の講演があった。「伊永隆史 (首都大東京): 飛行時間型質量分析装置の小型化から高機能化まで」「馬場嘉信 (名大院工): 次世代医療・創薬を創出する先端分析・計測機器開発」「岡本佳男 (名大エコ科学): HPLC 用キラル充填剤の開発と応用」の講演が行われた。引き続き、「先端分析・計測機器開発の将来に向けて」と題したパネルディスカッションが開催された。まず、澤田嗣郎会長、田中耕一氏 (島津製作所)、松本和子氏 (早稲田大学・総合科学技術会議)、北澤宏一氏 (科学技術振興機構) から各 10 分程度話題提供をいただいた後、3 名の講師をパネラーとして加えてパネル討論を行い、フロアからの質問に対して予定時間を若干超過するほど活発な議論が行われた。本シンポジウムは一般公開のシンポジウムとして開催され、一般の参加者も含めて約 300 名の参加者があり、また休憩室においてライブ中継の映像を上映して、できるだけ多くの皆様に参加できるようにした。内容も非常に重要なものであり、本年会の最後を飾るにふさわしい有意義なシンポジウムであった。

5 付設展示会

〔企画責任者: 原口紘丞 (名大院工), 神野清勝 (豊橋技科大工)〕

本年会では、付設展示会として機器展示とカタログ展示を行った。機器展示は、9 月はじめに開催された分析展と開催時期が近いために、申込件数が少ないのではないかと心配した

特別シンポジウム(一般公開)

「先端分析・計測機器開発のニューフロンティア」

主催:日本分析化学会第54年会実行委員会・日本化学会議

プログラム

主催者挨拶(13:00-13:10)
原口紘丞(日本分析化学会第54年会 実行委員長)
寺部 茂(日本化学会議 化学研究連絡委員会委員)

第1部:先端分析・計測機器開発事例研究(13:00-15:25)
伊永隆史(首都大学東京大学院理学研究科 教授)
演題:「飛行時間型質量分析装置の小型化から高機能化まで」
馬場嘉信(名古屋大学大学院工学研究科 教授)
演題:「次世代医療・創薬を創出する先端分析・計測機器開発」
岡本佳男(名古屋大学エトピア科学研究所 名古屋大学名誉教授)
演題:「HPLC用キラル充填剤の開発と応用」

第2部:先端分析・計測機器開発の将来に向けて
澤田嗣輝(日本分析化学会会長、東京理工大学 教授) 司会
北澤宏一(独) 科学技術振興機構理事、東京大学名誉教授
田中耕一(島津製作所フェロー; 2002年度ノーベル化学賞受賞)
松本和子(総合科学技術会議議員; 早稲田大 教授)

講演者3名

日時:9月16日(金) 13:00-17:00
場所:名古屋大学IB電子情報館大講義室(東山キャンパス)



特別シンポジウムのポスター

が、関係各位の努力により21社から22ブースと予想を上回る多数の申込があった。機器展示会場は、ポスター会場内に展示ブースを設置して作製したが、若干スペースに限られるという問題はあったものの、非常に多数の参加者がおり、出展会社および参加者にはおおむね好評であった。また、機器展示と併せて、出版社3社と音響メーカー1社による販売も行った。カタログ展示は、一般講演会場の集中していた工学研究科1号館のロビーで行い、10社ほどの参加があった。

6 表彰式

学会賞等各賞の授賞式は、2日目の14時からIB電子情報館大講義室で行われた。澤田会長の挨拶に引き続き、学会賞、学会功労賞、技術功績賞および有功賞の各審査委員長からそれぞれの賞の審査経過並びに受賞者と業績が説明された後、会長から賞状と副賞が贈呈された。その後、15時20分より受賞会場にて、寺前紀夫、平井昭司、松本和子の3氏による学会賞受賞記念講演が行われた。また、技術功績賞を受賞された瀬戸康雄氏、奨励賞を受賞された平野愛弓、山口 央、吉田秀幸の3氏の受賞講演は、関連する一般講演会場で行われた。恒例となっている有功賞受賞者の記念撮影は、授賞式の後、式典会場の玄関前で行われた。

7 テクノレビューおよび研究懇談会講演

テクノレビューは、分析機器・装置・器具、分析技術及び分析化学関連の情報を広く会員に発信していただく企画で、企業と参加者の双方にとって非常に意義深いものである。テクノレビュー講演は、一般口頭発表と異なり30分の持ち時間が与えられているため、一般講演より詳しい研究内容を拝聴することができる。本年会では、このような趣旨に賛同いただいた24の企業などから31件の申込・講演があり、企画側として大変うれしい限りであった。一方、研究懇談会講演として、11懇談会で14件の講演が行われた。この講演会は、各研究懇談会が演者と座長を選定するため、焦点の絞られた研究発表となり、活発な討論をはじめとして実のある講演会となったと思われる。

8 見学会

名古屋大学では、全国の国立大学に先駆けて、廃棄物や化学物質の全学一元管理を推進している。そこで、「名古屋大学廃棄物・化学物質全学一元化管理システム」と題した見学会を、2日目12時から13時に行い、大学や企業から約10名の参加者があった。まず、一般廃棄物(ごみ)の全学一元回収システムについて、集積場の見学などを含めて説明した後、名古屋大学化学物質管理システム(MaCS-NU)のデモやサーバ室の見学を行った。限られた時間ではあったが、見学者から活発な質問があるなど、有意義な見学会となった。

9 ミキサーおよび懇親会

ミキサーは1日目18時より、講演会場から少し離れた名古屋大学生協フレンドリー南部で開催された。若手ポスター会場と隣接した会場を使用したため、200名を越える参加者があった。開会の挨拶などに続き、若手ポスター賞の表彰が行われた後、若手シンポジウムの講師である真道先生の発声で乾杯となり、宴となった。名大生協のご協力により、若手向きのボリュームのある料理に加えて、名古屋名物の味噌串かつ、エビフライ、きしめんなどが振る舞われ、参加者の皆様には十分満足いただけたものと思われる。

懇親会は2日目18時30分より、メルパルク名古屋にて開催された。開催に先立ち、名古屋大学交響楽団の弦楽アンサンブルとウェルカムドリンクで皆様をお迎えした。懇親会は、原口実行委員長の歓迎の挨拶から始まり、澤田会長の挨拶に引き続いて、来賓としてお招きした今回の年会開催校である名古屋大学の澤木宣彦工学研究科長からご挨拶をいただいた。その後、田中元治元会長の発声で乾杯となり、宴となった。今回の懇親会は着席形式で催されたこともあり、終始穏やかな雰囲気で行われた。会はその後、Warsaw大学のProf. Trojanowicz氏からスピーチをいただき、次期分析化学討論会開催地、秋田大学の小川信明先生、および次期年会開催地、大阪大学の渡會仁先生から両集会へのお招きの挨拶があり、最後に中村俊夫中部支部長が懇親会のお開きを宣し、会を終了した。

10 おわりに

本年会では、参加登録証のケース兼記念品として、登録者全員に愛知万博のマスコット入りのネームホルダを配布したが、皆様に思いのほか好評であった。また、パワーポイントによる講演のために、25台のノートパソコンをリースするなど、本年会では従来と比較して若干出費がかさむ結果となった。テクノレビュー講演や付設展示会などは、産学官連携だけでなく財源確保という観点からも、今後とも積極的に活用することが重要であると感じられた。

本第54年会は、約40名の実行委員の方々が、各担当分野でご努力していただいたおかげで大きなトラブルもなく終了させることができた。本部事務局の方々には、初歩的な質問から懇切丁寧にご対応いただいた。また、中部化学関係学協会事務局の皆様には、実行委員会の運営などにご協力いただいた。年会の運営にご尽力いただいたすべての皆様に対し、原口紘丞実行委員長に代わり感謝申し上げます。最後に、実行部隊として熱心にお手伝いいただいた約60名のアルバイト学生の皆様、実行委員会事務局を支えていただいた熊谷文枝さんに心から感謝致します。

〔第54年会実行委員会庶務幹事 藤森英治〕